いわゆる「ウナギ文」発話の表意解釈とその記録形式

高　本　條　治

キーワード：ウナギ文、表意、解釈記録形式、構造拡張、構造保持

要　旨

いわゆる「ウナギ文」については多くの先行研究があり、ウナギ文の語彙統語構造と、ウナギ文発話の表意解釈とを結びつける試みが行われてきた。その多くに、ウナギ文に対するパラフレーズに相当する表現が見られる。このようなパラフレーズ表現は、ウナギ文発話に対する解釈を、限定的かつ明示的に表示した「解釈記録形式」と見なすことができる。発話解釈が共通であっても、それを再コード化して表示する解釈記録形式は必ずしも一通りとは限らない。ここに着目すると、ウナギ文発話の表意解釈をどのような形式で再コード化して表示するかが、従来のウナギ文研究の対立点の一つを構成していたという見方が可能となる。

1　表意解釈と明示性

Sperber and Wilson（1986）は、発話理解の過程を、「表意（explicature）」[注1]を理解する段階と、「推意（implicature）」を理解する段階とに区別した。

表意と推意は、どちらも発話を解釈することで得られる想定（assumption）であるが、両者は明示性（explicitness）という基準によって区別される。すなわち、明示的に伝達される想定が表意であり、非明示的に伝達される想定が推意である。

明示性は、次のように定義されている（p. 182）。

（1）　ある発話 U によって伝達された想定は、U によってコード化された論理形式（logical form）から発展されたものである場合に限り、明示的である。

論理形式は、発話の言語形式をコード解読することによって得られる抽象的な意味表示であり、いわば発話の文字通りの意味に相当する。一つの発話形式に対応する論理形式は、必ずしも一通りとは限らない。したがって、論理形式の選択が解釈上問題となることも少なくない。また、論理形式が限定されたとしても、この論理形式の段階では、指示関係の特定がまだ行われていなかったり、曖昧性や漠然性が除去されないまま残っていたり、さまざまな意味的な敷衍や拡張を行うことのできる余地が残っていたりする。そこで、利用可能なさまざまな文脈情報を用いて、指示関係の特定、曖昧性の除去、敷衍拡張などを施すことが、解釈過程には求められることになる。これが、（1）に言う論理形式の「発展」の内実であり、論理形式を発展させて得られる想定を、Sperber and Wilson（1986）は命

題形式と呼んでいる。これは、Blakemore(1992)の用語では、表出命題、ないしは、低次表意と呼ばれる。

さらに、命題形式は、命題態度や発話行為のタイプを示す枠組みの中に、随意的に埋め込まれることでさらに発展する。Sperber and Wilson（1986）は、命題態度や発話行為のタイプを示す枠組みについても、発話によって明示的に伝えられている内容、すなわち表意の一部であると位置づけている。Blakemore(1992)は、この段階を低次表意と区別して、高次表意と呼んでいる。

一方、発話によって明示的に伝えられた内容だとは見なすことができないすべての想定が推意である。表意が、発話の論理形式を意味的に限定したり敷衍したりすることによって得られるのに対して、推意は、それとは別個の論理形式を文脈推論によって新たに導入することによって得られる。推意は本稿の主題と直接関係しないのでここでの詳述は避ける。[注2]

多かれ少なかれ、聞き手は、文脈に応じた推論を行うことによって話し手が意図した表意を段階的に復元する必要がある。しかしながら、同等の表意を復元できる発話であっても、明示性の高い発話と、明示性の低い発話がある。後者の場合、表意の復元に当たって、聞き手の推論に依存する比率が大きく、前者に比べると相対的に表意解釈の不確定性(曖昧性や漠然性）も大きくなる。

さて、食堂などでうなぎ料理を注文するときに使われるとされる「ぼくはウナギだ。」という、いわゆる「ウナギ文」発話も、明示性がそれほど高くない発話の一つである。このことから多くの議論が生まれることになった。「ウナギ文」については、自称他称を合わせると多くの「～説」が存在する。奥津（1981）は、それを「述語代用説」「ノダ説」「コピュラ説」「分裂文説」の４種に分類し、沼田（1987）は、これに「省略説」を加えて５種に分類している。これら諸説の中で、ウナギ文は、しばしば独自な構文原理をもつと見なされ、それ以外の「Ａは Ｂだ」構文からは区別されることが多かった。本稿では、ウナギ文発話の表意解釈がどのような言語形式で明示されてきたかを手がかりにして、ウナギ文に関する先行研究が内包している問題点の一つを考察してみたい。

2　解釈記録形式

解釈上の不確定性を有する発話について、その解釈を限定的に明示したい場合がある。例えば、幼稚園の先生が、幼稚園児に向けて次のような発話をしたとする。

（２）　おてがみ、わすれずわたしましょう。

この発話は少なくとも２通りの解釈が可能であり、それぞれ、例えば次のように表示することができる。□は、解釈内容を明示するために補われた拡張要素である。

（３）ａ．［おうち$_i$にかえったら］［幼稚園からの］おてがみ［を］

［おうち$_i$のひとに］わすれず　わたしましょう

ｂ．［幼稚園$_j$に着いたら］［おうちからの］おてがみ［を］

［幼稚園$_j$の先生に］わすれずわたしましょう

この(3)のa・bはどちらも、新たな拡張要素を接合することによって、元の言語形式(2)が有していた解釈上の不確定性を低減させ、一定の解釈内容を限定的に明示している。その一方で、元の発話形式(2)が有していた語彙統語構造の骨組みは、(3)a・bにおいてもおおむね保持されている。構造特性をできるだけ保持しながら、解釈を限定的に明示するこのような言語形式を、「解釈記録形式」[注3]と呼ぶことにしたい。

別の例を見よう。次の二つの発話には、いずれも平易な文が用いられており、解釈上の問題などないように見える。

(4)　ぬいだパジャマはたたみましょう。

(5)　かかとをふまずにはきましょう。

しかし、次のように解釈記録形式を作成してみると、(4)・(5)の表意を理解するためには、一定の推論が必要であったことが明確になる。

(6)　[自分$_i$が] ぬいだパジャマは [ぬいだらすぐに] [自分$_i$で] たたみましょう

(7)　[くつ$_i$の] かかと [の部分] をふまずに [くつ$_i$を] はきましょう

このように、解釈記録形式は、文脈に応じた推論の成果をも取り込みながら、解釈内容を限定的に明示することができる。

解釈記録形式の特徴をまとめると、次のようになる。

(8)　a．解釈記録形式は、元の言語形式が有する語彙統語構造に対して、構成素を置き換えたり、新たな構成素（拡張要素）を接合することにより、構造拡張を施した言語形式[注4]である。解釈記録形式は、拡張要素を接合することで、さまざまな解釈的想定[注5]を限定的に明示することができる。

b．構造拡張を行う際には、元の言語形式が有していた語彙統語的な構造特性をできるだけ変容させないという条件、すなわち、構造保持[注6]の条件が随意的に働く（常にこの条件が厳格に守られるとは限らない）。

また、解釈記録形式には、次のような制限事項があることに注意が必要である。

(9)　a．解釈記録形式は、可能な解釈のうちのたかだか一つのタイプについて限定的に示すことしかできない。可能な解釈のすべてを包括的に示すためには、複数の解釈記録形式を並記せざるをえない。

b．接合される拡張要素、および、接合の結果新たに生み出される構造体は、個別言語のコードに従って語彙統語的に適格でなくてはならない。適格な言語形式を生みださないような構造拡張は、通常は採用されない。

c．一つの解釈タイプに対して、複数の解釈記録形式を作ることができる。逆に言えば、複数の解釈記録形式が存在するからといって、必ずしも、複数の解釈タイプが存在するというわけではない。

このうち、特にcが重要である。例えば、(3)のように、一つの発話に対して、複数の解釈記録形式が得られる場合が少なくない。そのとき、その違いが、解釈タイプの差を反映したものなのか、たかだか解釈の程度の違い[注7]なのか、あるいは単に記録段階のコード化

の違いだけなのか、こういう点を明確に区別することが語用論研究においては重要な意味をもつ。なぜならば、語用論は、解釈過程には言語のコード解読以上のものが明らかに含まれると見ており、知覚表象・記憶・感情など、さまざまな認知資源を用いた非言語的な処理過程をも、解釈過程の一部として取り扱わなくてはならないという自覚をもっているからである。したがって、そのような非言語的な処理過程をも含めて、個々の解釈のありようを明示的に(かつ、できるだけ客観的に)記録するための手段が、語用論には必要になる。私は、解釈記録形式をそのような手段の候補の一つとして位置づけたいと考えている。

3　構造拡張のタイプ分類

解釈記録を行う際の構造拡張のタイプは、元の構造ツリーに対する、拡張要素の接ぎ木のしかたによって分類することができる。いま、新たに接合される拡張要素が占める構造位置に基づき、構造拡張のタイプを次の二つの軸を用いて区別することにしよう。

(10)　a．主要部拡張（head-grafting）か、付加部拡張（adjunct-grafting）か。
　　b．内部拡張（endo-grafting）か、外部拡張（exo-grafting）か。

例えば、「太郎」という役者の芝居を見ながら、その演技の出来映えについて、話し手が次のような発話を行ったとする。

(11)　今日の太郎はさえない。

この文の構造特徴を簡略に示したのが、図１の構造ツリーである。話し手が太郎の演技に対する評価を述べていることを理解した聞き手が、図１の構造の骨組みをできるだけ保持しながら、自らの解釈内容を記録する場合、図２・図３の例１〜例６に示したような構造拡張のしかたが可能である。□は拡張要素を示す。

図１　例文(11)の構造

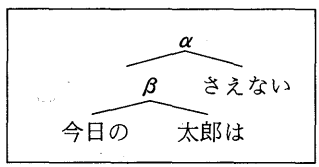


図２の例１では、拡張された節点（「演技は」）が、それを直接支配する節点の右分枝の位置にある。これは、日本語の統語構造の上で主要部（head）に相当する位置である。こ

図２　主要部拡張（head-grafting）の例

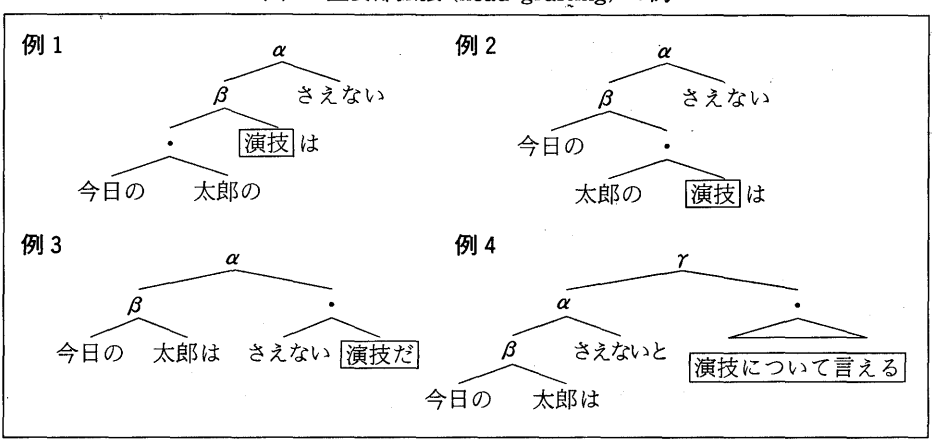
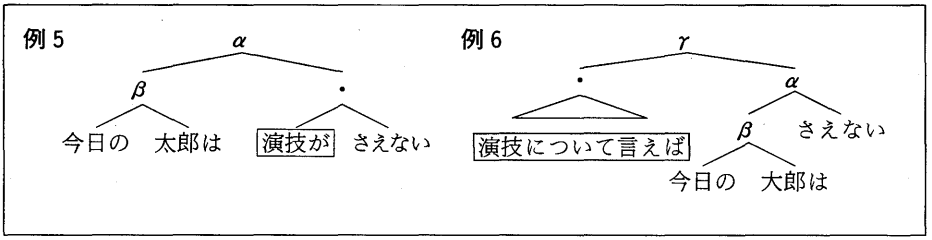


図 3　付加部拡張 (adjunct-grafting) の例



のように、拡張された節点が、それを直接支配する節点の主要部を占めるような構造拡張のしかたを「主要部拡張」と呼ぶ。例 2〜例 4 も同様である。

それに対して、図 3 の例 5 では、拡張された節点 (「演技が」) は、それを直接支配する節点の左分枝の位置、すなわち、付加部 (adjunct) に相当する位置にある。このように、拡張された節点が、それを直接支配する節点の付加部を占めるような構造拡張のしかたを「付加部拡張」と呼ぶ。例 6 も同様である。

しかし、主要部拡張か、付加部拡張か、という軸だけでは、構造拡張のタイプを十分に分類することができない。そこで、第二の軸が必要となる。それが、内部拡張か、外部拡張か、という軸である。

再び、図 2 の例 4、および、図 3 の例 6 を見ると、□で示した拡張要素は、元の構造 (図 1) のルート節 α と姉妹関係にある構造位置を占めている。その結果、元の構造のルート節点 α と拡張された節点とを直接支配する位置に、新しい節点 γ が付け加えられている。いわば、元の構造をすっぽり埋め込むような構造拡張が行われているわけである。このように、拡張された節点が、元の構造のルート節点と姉妹関係にある構造位置を占めるような構造拡張のしかたを「外部拡張」[注8] と呼ぶ。言い換えると、元のルート節点を直接 c 統御する位置に、新しい節点を拡張するような構造拡張のしかたである。

一方、図 2 の例 1〜3、および、図 3 の例 5 では、構造拡張の結果作られた新しい節点は、いずれも元の構造のルート節点 α に支配される位置にある。このように、拡張されたすべての節点が、元の構造のルート節点に支配される構造位置を占めるような構造拡張のしかたを「内部拡張」と呼ぶ。

したがって、例 1〜例 6 に見られる構造拡張は、上述の二つの軸を用いて次のように分類できることになる。

(12)　a. 主要部拡張＋内部拡張……例 1・例 2・例 3
　　b. 主要部拡張＋外部拡張……例 4
　　c. 付加部拡張＋内部拡張……例 5
　　d. 付加部拡張＋外部拡張……例 6

ここで注意したいことは、構造拡張の結果できあがった例 1〜例 6 は、互いに異なった構造をもつ形式ではあるけれども、いずれも (11) の発話に対する同等の解釈を表示しているという点である。一つの発話に対する一定の解釈を記録する際に、その記録形式が必ずしも一通りだけとは限らないということは、すでに (9) c に述べた通りである。

4 ウナギ文についての「変形」による記述・説明

ウナギ文についての先行研究において、論争の中心に位置していたのが、「変形」という考え方を用いた記述・説明である。これは、変形過程によって、「ぼくはウナギだ」という文構造が「派生」されるという考え方である。そこでは、まず、「ぼくはウナギを食べたい」、「ぼくが食べたいのはウナギだ」のような、形式的・意味的に完備された文構造を「基底文」、すなわち、深層的な初発の構造として仮定する。次に、この基底文ないしは深層構造に対して、位置転換、付加、削除、代用など一連の形式操作が行われる変形過程を仮定する。これまで主張された変形過程のうち、主要なものを表１に示した。

表１ ウナギ文を「派生」する主な「変形過程」

a. 山口(1965)の変形過程

ぼくの注文がうなぎだ　（注文＝うなぎ）
　－①→　注文はぼくがうなぎだ
　－②→　ぼくがうなぎだ(ぼく≠うなぎ)
　－③→　ぼくはうなぎだ(　〃　)

(注)山口は、「この種の構文は一般にT＝T′とも T ノ x＝T′とも解され、このxを求めることが解釈上の一課題となる」と述べている(p.38)。

b. Muraki(1974)の変形過程

Kinoo Mary-ga unági-o tabe-ta　①
→ Kinoo-wa [$_v$ unági-o]　②
→ Kinoo-wa unági-o-da　③
→ Kinoo-wa unági-da　④

(注)「ぼくはウナギだ」の場合は次のような変形過程となる。
　ぼくがウナギを食べる
　→ぼくはウナギをϕ
　→ぼくはウナギをだ
　→ぼくはウナギだ

c. 奥津(1978)の変形過程－「述語代用説」

ボクハ　ウナギヲ　tabe-ru　$\xrightarrow{*}$
ボクハ　ウナギヲ　d　-a　$\xrightarrow{**}$
ボクハ　ウナギ　ダ

(注)＊印では「『ダ』ニヨル述語ノ代用」という「任意の変形規則」が、また、＊＊印では「格助詞ノ消去」という「任意の変形規則」が仮定されている。

d. 北原(1981)の変形過程－「分裂文説」

ぼくが うなぎが 食べたい
→ぼくが食べたいのは うなぎだ*
→ぼくののは うなぎだ
→ぼくのは うなぎだ
→ぼくは うなぎだ

(注)北原は、ウナギ文は＊印の分裂文から派生したものだとしている。また、堀川(1983)も、「分裂文を基底にした省略文こそうなぎ文の正体」だとしている。

e. 北原(1984)の変形過程－「部分分裂文省略説」

① A が B { が / に / を　P / ナド
↓
② A が P が B だ
↓
③ A が B だ
↓
④ A は B だ

(注)「ぼくはウナギだ」の場合は次のような変形過程となる。
① ぼくがウナギが食べたい
↓
② ぼくが食べたいのがウナギだ
↓
③ ぼくがウナギだ
↓
④ ぼくはウナギだ

ウナギ文を変形によって派生するという見方に対しては、安藤(1986)、杉浦(1991)をはじめ、すでにいくつかの反論が出されている。私自身も、ウナギ文発話が実際に伝達する意味を構造面だけから説明するのは、「過剰な文法化(overgrammaticalization)」[注9]に通じると考えている(高本1996a参照)。しかし、当面この問題には立ち入らず、変形によってウナギ文の成立を説明することの問題点については、第7節で述べたい。

ここで注目したいのは、ウナギ文を派生する変形過程を逆にたどると、ウナギ文に対する構造拡張の過程としても見ることができる、という点である[注10]。表1に示した一つ一つの変形過程について、その矢印を逆にたどってみる。すると、「ぼくはウナギだ」という文の構造特性を一定範囲で保持しながら、構成素を置き換えたり、新たな構成素を付け加えたりして、段階的な構造拡張を行っている過程が見えてくる。変形過程を裏返しにして拡張過程として見るとき、変形過程において初発の基底構造であった形式は、拡張過程においては、ウナギ文の発話形式を語彙統語的に敷衍拡張した言語形式に相当する。このように、変形過程の初発の言語形式は、ウナギ文の表意解釈の内容を、日本語によって再コード化した解釈記録形式としての性格をも持っている。

5 ウナギ文に対するパラフレーズと構造拡張

「ぼくはウナギだ。」というウナギ文発話について、その表意解釈をコード化して明示した言語形式、すなわち、ウナギ文の解釈記録形式を、仮に P としよう。このとき、P は、ウナギ文に対するパラフレーズに相当する表現になっている。

ウナギ文の先行研究では、ウナギ文の語彙統語構造と、ウナギ文の解釈記録形式 P とを、構造的な観点から結びつけようとする傾向が強かった。例えば、前節に述べたように、変形説では、この P を初発の基底構造として、「P を変形した結果、ウナギ文が派生される」という見方がとられていた。

ウナギ文と、解釈記録形式 P との結びつけ方として、先行研究には、次のようなパターンが見られる[注11]。

(13) a. P を変形した結果、ウナギ文が派生される。
b. 元の形式 P の一部が削除されてウナギ文になる。
c. P の一部を省略したのが、ウナギ文である。
d. ウナギ文は、P を縮約した表現である。
e. ウナギ文は、P をはしょった表現である。
f. ウナギ文は、P という形式に復元できる。

これらはいずれも、「ウナギ文によって、P で示される内容が伝達される」ということを前提にして、ウナギ文の構造と P とを結びつけようとしている。表2は、ウナギ文の先行研究において、どのようなパラフレーズが行われているのか、すなわち、どのような解釈記録形式が採用されているのかをまとめたものである[注12]。

第2欄のNHR・NHL・NAR・XAは、構造拡張のタイプを分類した記号であり、タイプの区切りを破線で示した。このようにウナギ文に対するパラフレーズは4タイプに分類できる。

表２　ウナギ文に対するパラフレーズ（解釈記録形式）の例

番号	タイプ	ウナギ文のパラフレーズ（解釈記録形式）	文献名
1	NHR	ぼくはウナギを注文する	三上(1960)*、国立国語研究所(1963)、久野(1978)、仁田(1980)
2	NHR	ぼくはウナギを注文したのだ	Martin (1975)*
3	NHR	ぼくはウナギを注文したいのだ	川合(1978)*
4	NHR	ぼくはウナギを食う	金田一(1955)
5	NHR	ぼくはウナギを食べる	奥津(1978)、仁田(1980)、尾上(1981)、杉浦(1991)*
6	NHR	ぼくがウナギを食べる	Muraki (1974)*
7	NHR	ぼくはウナギを食べたい	国立国語研究所(1963)
8	NHR	ぼくはウナギが食べたい	奥津(1978)
9	NHR	ぼくがウナギが食べたい	北原(1984)
10	NHR	ぼくはウナギが食べたいのだ	三上(1955)
11	NHR	ぼくはウナギを食べることにするのだ	川合(1978)*
12	NHR	ぼくはウナギにする	大久保(1973)、川合(1978)*、尾上(1982)
13	NHR	ぼくはウナギに決めた	国立国語研究所(1963)
14	NHL	ぼくが食べるのはウナギだ	仁田(1980)
15	NHL	ぼくの食べたいのはウナギだ	三上(1955)
16	NHL	ぼくが食べたいのはウナギだ	北原(1981)
17	NHL	ぼくが食べたいのがウナギだ	北原(1984)
18	NHL	ぼくが注文するのはウナギだ	森岡(1980)、尾上(1981)、菊地(1995)*
19	NHL	ぼくの注文するものはウナギだ	仁田(1980)
20	NHL	ぼくが注文したいものはウナギだ	川合(1978)*
21	NHL	ぼくの注文はウナギだ	三上(1960)*、大久保(1973)
22	NHL	ぼくの注文がウナギだ	山口(1965)
23	NHL	ぼくのあれがウナギだ	川本(1976)
24	NAR	ぼくは食べたいのはウナギだ	堀川(1983)、安藤(1986)**
25	NAR	ぼくについて言えば食べたいのはウナギだ	川合(1978)*
26	XA	食べたいのはぼくはウナギだ	薬(1988)**
27	XA	何を食べるかというとぼくはうなぎだ	全(1992)**

*　用例中の語彙項目を改めたもの

**　論旨に従って作例したもの

分類には、以下に述べるような基準を用いた。まず、「ぼくはウナギだ」というウナギ文の構造は図４のようなツリーで表すことができる。この構造が有する特性をできるだけ保

持しながら、拡張要素を接合するしかたとしては、図5の6通りが考えられる。ここでは、名詞「ぼく」と名詞「ウナギ」とが占める構造位置を示すことで、構造拡張のタイプの違いを明示している。□で示したスロットは、拡張要素が接合される位置を示し、β節点は、構造拡張の結果新たに作られた節点を示す。また、「_」は、日本語として適格な表現形式を作るために、種々の付属語要素として実現されるものとする。

図4　ウナギ文の構造ツリー

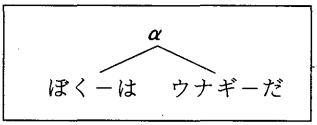
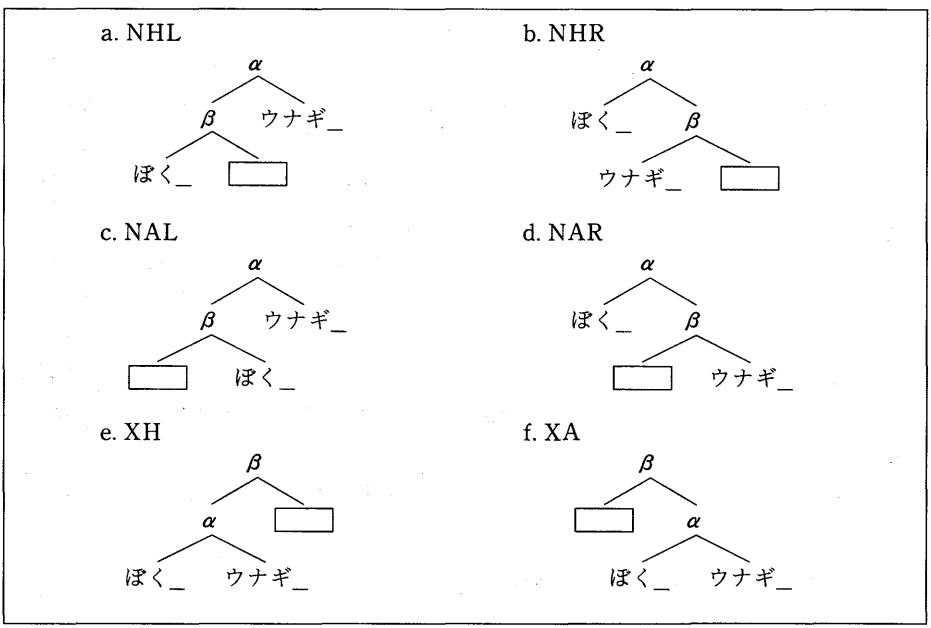


図5　可能な構造拡張のパターン



構造拡張のパターンを区別する記号の意味は、次の通りである。

(14)　a．1文字目……内部拡張であれば「N」(eNdo-grafting)
　　外部拡張であれば「X」(eXo-grafting)
　　b．2文字目……主要部拡張であれば「H」(Head-grafting)
　　付加部拡張であれば「A」(Adjunct-grafting)
　　c．3文字目……節点βが節点αの左分枝に生じれば「L」
　　節点βが節点αの右分枝に生じれば「R」

外部拡張（XH・XA）の場合には、新しい節点βは元のルート節点αの上位に作られるので、「L」と「R」の区別はなく、パターンを区別する記号は2文字だけで構成される。

6　「AはBだ」構文の構造拡張

前述の通り、ウナギ文の先行研究に見られるパラフレーズはNHR・NHL・NAR・XAの4タイプであり、NALタイプとXHタイプは採用されていない。その理由を考えるため

に、次のような文脈で発話された三つの「AはBだ」構文を検討してみたい。

(15) A：失礼ですが、お名前をお聞かせ下さい。
　　B：私は山口です。……ア

(16) A：弟の太郎君は今どちらに住んでいるのですか？
　　B：弟は秋田です。……イ

(17) A：妹さんにお子さんが産まれたそうですが、男の子ですか、女の子ですか？
　　B：妹は男でした。……ウ

(15)のアがウナギ文とは見なせないのに対して、(17)のウは典型的なウナギ文の一例である。また、(16)のイは、いわばその中間に位置すると見られる。

次ページの図6は、上記の三つの「AはBだ」構文（ア～ウ）について、それぞれの文脈に応じて得られた解釈内容を明示するために、図5のパターンに従って構造拡張を行ったものである。図6の下に注記しているように、NALタイプ(c)とXHタイプ(e)については、日本語として適格な語彙統語構造を作り出すことが困難である。それに対して、NHL・NHR・NAR・XAの各タイプについては、構造拡張の結果、適格な表現形式を作ることができる。

ウナギ文であるかどうかに関わらず、「AはBだ」構文には、構造拡張の可能性について二つの共通点があるということを、図6は示唆している。その第一は、NAL・XHの2タイプの構造拡張が不可能だということ、第二は、一定の解釈内容を明示する場合に、NHL・NHR・NAR・XAの4タイプのうち、いずれの構造拡張も選択可能だということである。

したがって、ウナギ文の先行研究にNALタイプとXHタイプのパラフレーズが見られなかったことは、単なる偶然なのではない。もとより、NAL・XHという2タイプの構造拡張には、「AはBだ」構文に対して、日本語として適格な解釈記録形式を作ることのできる可能性がきわめて低いのである。

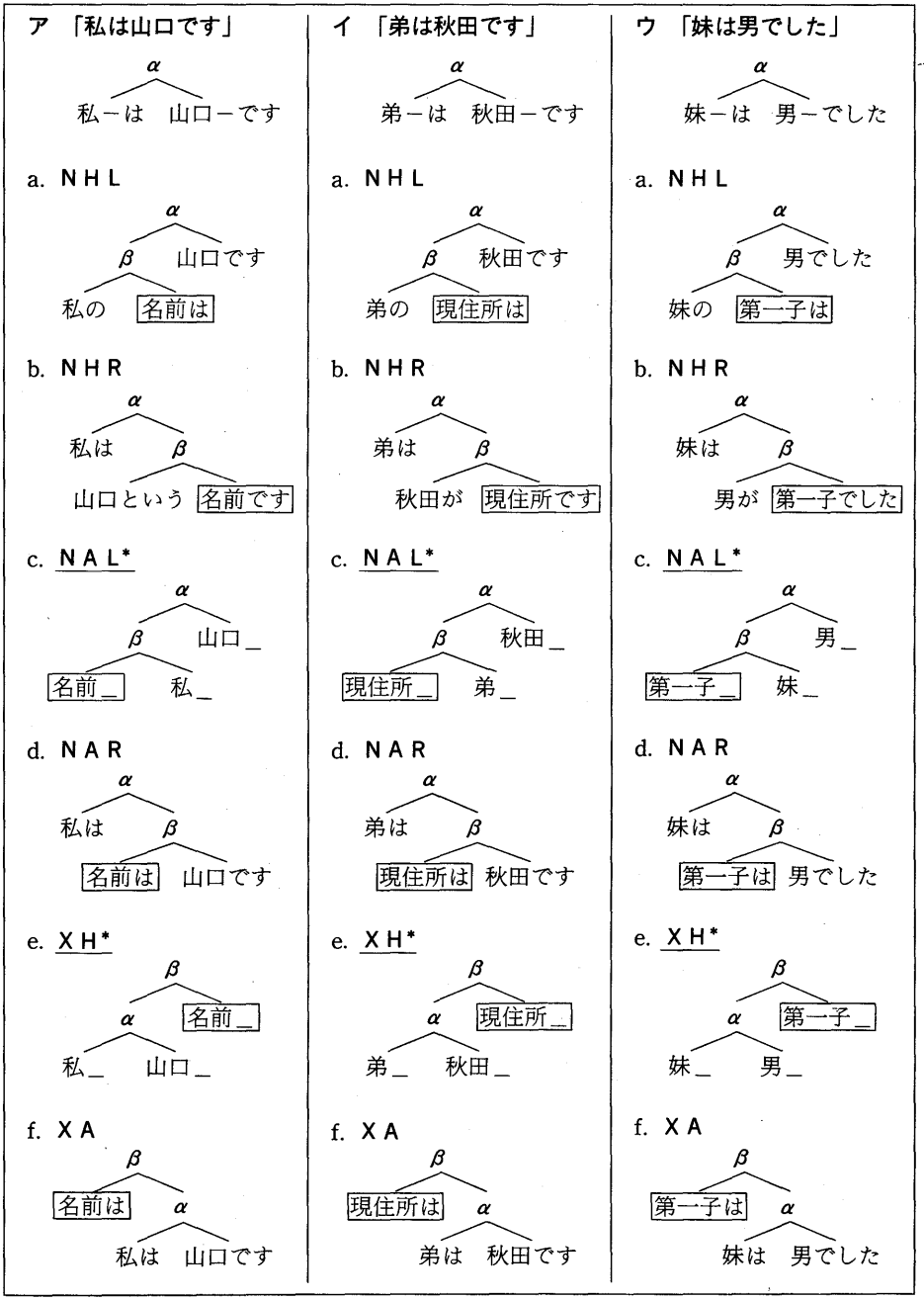
7　ウナギ文の先行研究と解釈記録形式の選択

ウナギ文に対する従来の研究では、変形操作のための基底構造として妥当な形式はどれか、省略や縮約が起こる前の完全な形式はどれか、ということが議論の対立点となっていた。しかし、ウナギ文以外の「AはBだ」構文についても、NHL・NHR・NAR・XAの4タイプの構造拡張が可能であるという事実は、ウナギ文とその他の「AはBだ」構文とに、解釈上の類似性や連続性があることを示している。ウナギ文だけに特殊な統語構造や派生過程を仮定するという見方には、改めて反省を加えてみる必要がありそうである。

例えば、先に表1で示したように、変形を用いてウナギ文の成立を論じた先行研究においては、「ぼくはウナギだ」という文を派生する基底構造として、次のような形式が仮定されていた。

(18) a．山口（1965）：[$_{\alpha}$ [$_{\beta}$ ぼくの $\boxed{\text{注文が}}$] ウナギだ]　　(NHLタイプ)
　　b．奥津（1978）：[$_{\alpha}$ ぼくは [$_{\beta}$ ウナギを $\boxed{\text{食べる}}$]]　　(NHRタイプ)
　　c．北原（1981）：[$_{\alpha}$ [$_{\beta}$ ぼくが $\boxed{\text{食べたいのは}}$] ウナギだ]　(NHLタイプ)

図6 「AはBだ」構文に対する構造拡張



＊NALタイプとXHタイプについては、日本語として適格な語彙統語構造を作り出すことが困難であるため、不完全な形式のままとなっている。

しかし、これらをウナギ文の基底構造だと言うのであれば、(15)のアや(16)のイのような文、すなわち、典型的なウナギ文とは言えない「AはBだ」構文についても、同様の基底構造(「私の名前は山口だ」、「弟は秋田が現住所です」など)を仮定しても構わないはずである。完全な文の一部が、省略されたり、縮約されたりした結果としてウナギ文が成立するという見方に対しても、同様の指摘が可能である。

本稿では、基底構造や完全形式とされてきた表現形式も含めて、ウナギ文発話に対するパラフレーズ表現を、その表意解釈についての記録形式であると位置づけた上で整理した。その結果、ウナギ文発話に対する表意解釈が共通であっても、それを再コード化して表示する場合の記録形式は、一つだけとは限らないということが明らかになった。だとすれば、ウナギ文発話に関する記述・説明の多様さのある部分は、解釈記録形式の選択のしかたの問題として扱うことのできる可能性が出てくる。それは、ウナギ文発話の語彙統語形式から得られる(語用論的推論も含めた)表意解釈の内容と、その解釈内容を再コード化して得られる解釈記録形式とを、区別して論じることができるという可能性でもある。

本稿で指摘しえたことは以上のような見通しの範囲を超えるものではないが、所定の言語形式からコード解読と文脈推論によって得られる解釈内容そのものと、その解釈内容を再び言語コード化することによって得られる解釈記録形式とを区別することは、単にウナギ文研究にとどまらず、語用論研究にとって重要な方法的自覚をもたらすと考えている。

注1　表意と推意の区別については、Sperber and Wilson(1986)の他、Blakemore(1992)、Wilson(1994)、Grundy(1995)を参照のこと。また、表意と推意を区別することの妥当性、ならびに、この区別にまつわる問題点については、Carston (1988)、Récanati (1989) の議論がきわめて示唆に富んでいる。

注2　表意と推意の区別が関係する、この種の具体的な解釈問題については、高本(1994、1995 a、1996 b) で事例的分析を行っている。

注3　解釈記録形式 (interpretation recording form) は、解釈内容を再び言語コード化して表示することによって得られる。したがって、解釈再コード化(re-coding)形式であるとも言える。

注4　論理形式・命題形式が心的表示であるのに対して、解釈記録形式は、元の発話形式と同様に言語形式である点に注意しなくてはならない。このことから、本文の(9)に示したような制限事項が生じる。

注5　解釈記録形式には、指示関係の特定、曖昧性の除去、省略要素の顕在化、命題態度や発話行為タイプの特定、推意前提や推意帰結の結合など、さまざまな文脈推論の成果が取り込まれる。

注6　具体的には、各構成素の語彙統語的な範疇のタイプ、構成素間の先行関係、支配関係などについての構造保持が図られる。

注7　同じ発話に対する同じタイプの解釈であっても、ある聞き手は表意の復元すら不十分にしか行わないかもしれず、別の聞き手は十分な表意解釈に加えて、過剰なまでに豊かな内容の推意を解釈するかもしれない。また、発話に明示性の程度差があるのと同じように、解釈記録形式についても、解釈内容の明示性が高いものと低いものとを区別することができる。

注8　外部拡張の場合には、図2の例4・図3の例6のように、発話行為のタイプを示す拡張要素が接合されることが少なくない。

注9　'overgrammaticalization' は、Leech (1983) の用語で、「語用論的説明の方がふさわしい言

語行動の側面をも文法的に取り扱ってしまうこと」(p. 73) である。ウナギ文についての従来の説明は、本来、解釈の再コード化の過程で行われている構造拡張を裏返しにして、それをコード化やコード解読の過程の問題として処理するところから、構造縮小(省略、縮約、はしょり、削除) などの見方を生みだしてきたのではないかという指摘を、高本 (1996 a) で行っている。

注 10　ウナギ文を派生する変形過程を裏返すと、ウナギ文発話の構造拡張過程として見ることができるという見方は、すでに高本 (1995 b) でも述べた。

注 11　ウナギ文に関する個々の先行研究において、どのような解釈記録形式が採用されているか、すなわち、ウナギ文がどのようにパラフレーズされてきたか、ということについては、高本 (1995 b、1996 a) に具体的にまとめている。

注 12　表 2 では、対照の便を考慮して、「僕」「ボク」は「ぼく」に、「鰻」「うなぎ」は「ウナギ」に統一した。また、元の文献で「私はうどんだ」という例文が用いられている場合には、「私→ぼく」、「うどん→ウナギ」というように語彙項目を置き換えて、「ぼくはウナギだ」という例文に統一した(この場合は＊印を文献名の右肩に付した)。さらに、具体的なパラフレーズが行われていないものについては、論旨に従ってパラフレーズ表現を作例した (この場合は＊＊印を文献名の右肩に付した)。なお、変形説については、基底構造と、変形過程の中間段階で派生される主要な形式のみを取りあげている。

参考文献

安藤貞雄 (1986)『英語の論理・日本語の論理』、大修館書店.

池上嘉彦 (1981)『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店.

大久保忠利 (1977)『新・日本文法入門―新版』、三省堂 [初版 1973 年].

奥津敬一郎 (1978)『「ボクハ　ウナギダ」の文法』、くろしお出版 [増補版 1983、1993 年].

―― (1981)「ウナギ文はどこから来たか」、国語と国文学 58-5 [奥津 (1978) の増補版に収録].

―― (1989)「うなぎ文と『だ』の文法」、井上和子〔編〕『日本文法小事典』(IV-2)、大修館書店.

尾上圭介 (1981)「『象は鼻が長い』と『ぼくはウナギだ』」、月刊言語 10-2.

―― (1982)「『ぼくはうなぎだ』の文はなぜ成り立つのか」、国文学　解釈と教材の研究 27-16.

川合淳介 (1978)「省略について」、日本語学校論集 5.

川本茂雄 (1976)「日本語の文法の特色―視点の模索」、金田一春彦〔編〕『日本語講座 1 日本語の姿』、大修館書店.

菊地康人(1995)「『は』構文の概観」、益岡隆志〔ほか編〕『日本語の主題と取り立て』、くろしお出版.

北原保雄 (1980)「奥津敬一郎著『「ボクハウナギダ」の文法――ダとノ――』」(紹介)、国語学 120.

―― (1981)『日本語の文法』(日本語の世界 6)、中央公論社.

―― (1984)「うなぎ文再考」(文法を考える 10)、月刊国語教育 3-12 [北原保雄『日本語文法の焦点』(教育出版、1984 年) に収録].

金田一春彦 (1955)「日本語―文法」、市河三喜〔ほか主幹〕『世界言語概説 下』、研究社.

久野　暲 (1978)『談話の文法』、大修館書店.

国立国語研究所 (1963)『話しことばの文型(2)――独話資料による研究』、秀英出版.

佐藤定義 (1989)「長女はみんな男――提題成分・叙述成分・補充成分など」、相模国文 16.

杉浦滋子 (1991)「『だ』の意味――『うなぎ文』をめぐって」、東京大学言語学論集 12.

全　成燁 (1992)「『うなぎ文』の成立について――表現と理解のプロセス」、国語学研究 31.

高本條治 (1994)「何が旅ごころを誘うのか――JR 広告コピーの語用論的分析」、学苑 650.

――(1995 a)「カワセミは飛んでいるのか？――川端茅舎句『翡翠の影こんこんと溯り』の語用論的分析」、上越教育大学研究紀要 14-2.

―― (1995 b)「『ウナギ文』の語用論的分析(1)――文脈における語彙統語構造の発展と拡張」、上越教育

大学研究紀要 15-1.
——（1996 a）「『ウナギ文』の語用論的分析（2）——文脈における語彙統語構造の発展と拡張」、上越教育大学研究紀要 15-2.
——（1996 b）［印刷中］「蟬がなきだすとお礼が口をつく事情——柳句『せみがなき出すとお世話に成ました』の語用論的分析」、岡山大学国語研究 10.
仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』、明治書院.
沼田善子（1987）「うなぎ文」、寺村秀夫〔ほか編〕『ケーススタディ日本文法』、桜楓社.
堀川　昇（1983）「『僕はうなぎだ』型の文について一言葉の省略」、実践国文学 24.
三上　章（1955）『現代語法新説』、刀江書院［復刊：くろしお出版、1972 年］.
——（1960）「『象の鼻』をめぐって」、文学論藻 18.
森岡健二（1980）「伝達論からみた省略」、言語生活 339.
薬　　進（1988）「『ぼくはうなぎだ』型の文を考える——主題の隠形化」、日本語学 7-6.
山口　光（1965）「ぼくはうなぎだ——その変形文法的一解釈」、計量国語学 35.
山梨正明（1988）『比喩と理解』、東京大学出版会.
Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances : An introduction to pragmatics.* Blackwell.［武内道子〔ほか訳〕『ひとは発話をどう理解するか』、ひつじ書房、1994 年］
Carston, R. 1988. 'Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics'. In R. M. Kempson (ed.) *Mental Representation : The interface between language and reality.*, Cambridge University Press.
Grice, H. P. 1975. 'Logic and conversation'. In P. Cole and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics* 3 *: Speech acts.*, Academic Press.
Grundy, P. 1995. *Doing Pragmatics.* Edward Arnold.
Leech, G. 1980. *Explorations in Semantics and Pragmatics.* John Benjamins.［内田種臣〔ほか訳〕『意味論と語用論の現在』、理想社、1986 年］
——1983. *Principles of Pragmatics*. Longman.［池上嘉彦〔ほか訳〕『語用論』、紀伊國屋書店、1987 年］
Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics.* Cambridge University Press.［安井稔〔ほか訳〕『英語語用論』、研究社出版、1990 年］
Martin, S. E. 1975. *A Reference Grammar of Japanese.* Yale University.［Republished : Charles E. Tuttle, 1988.］
Muraki, M.（村木正武）1974. *Presupposition and Thematization.* Kaitakusha（開拓社）.
Récanati, F. 1989. 'The pragmatics of what is said'. *Mind and Language* 4.
Shibatani, M.（柴谷方良）1990. *The Languages of Japan.* Cambridge University Press.
Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance : Communication and cognition.* Blackwell.［内田聖二〔ほか訳〕『関連性理論一伝達と認知』、研究社出版、1993 年］
Wilson, D. 1994. 'Relevance and understanding'. In G. Brown, K. Malmkjær, A. Pollit and J. Williams (eds.), *Language and Understanding.*, Oxford University Press.

［付記］

本稿は、国語学会平成 7 年度秋季大会（於新潟大学）で行った口頭発表の内容をもとにして、加筆修正を施したものである。

——上越教育大学講師——

（平成 8 年 1 月 12 日　受理）
（平成 8 年 2 月 29 日　改稿受理）

Explicature Interpretation of So-called '*Unagi*-sentence' Utterance and its Recording Form

TAKAMOTO Jōji

Key words : *unagi*-sentence, explicature, paraphrase notation, structural expansion, structural preservation

Over the last few decades, a great number of studies have been made on the so-called '*unagi*-sentence', a Japanese sentence type exemplified by '*Boku wa unagi da*'. (lit. 'As for me, eel.') In these studies, many analyses have been proposed to integrate the lexico-syntactic structure of the *unagi*-sentence with the contextual interpretation of its explicature (i.e. the content expressed explicitly).

Almost all of these studies have adopted several types of paraphrase expressions for the *unagi*-sentence to illustrate the relationship between its lexico-syntactic structure and its explicature interpretation. Each paraphrase expression can be regarded as a kind of formal notation for definitely and explicitly recording a fixed interpretation of the *unagi*-

sentence.

In my view, even one common type of utterance interpretation may produce several types of paraphrase notations as a consequence of re-coding (i.e. linguistic reorganizing). Such a viewpoint makes it possible to regard the variety of descriptions of the *unagi*-sentence as partially due to the variety of ways of producing paraphrase notations which re-code a certain explicature of the *unagi*-sentence in use.